

【論 文】

傀儡女「延寿」伝承生成考

吉田山新長谷寺阿弥陀如来立像の伝承をめぐって

An Investigation into the Folklore of Kunitsume Enji

馬場光子 BABA, Mitsuho

はじめに

岐阜県関市長谷寺町に、吉田山新長谷寺という寺がある。

当寺は創建の鎌倉時代、後伏見天皇より勅額をたまわり、七堂伽藍に子院十六坊を構えた大寺であったという。その後正安二年(一三〇〇)と長祿元年(一四五七)の火災により焼亡。室町時代に再建されたが、江戸時代に幾度にも及ぶ修補が加えられ、また明治期における大修理により様式は大幅に変化してしまつたが、昭和二五・三五年におよぶ解体修理によって室町時代の様式の旧に復した。現在は、国より重要文化財と指定されている七堂伽藍(本堂・鎮守堂・薬師堂・釈迦)



図1 新長谷寺本堂

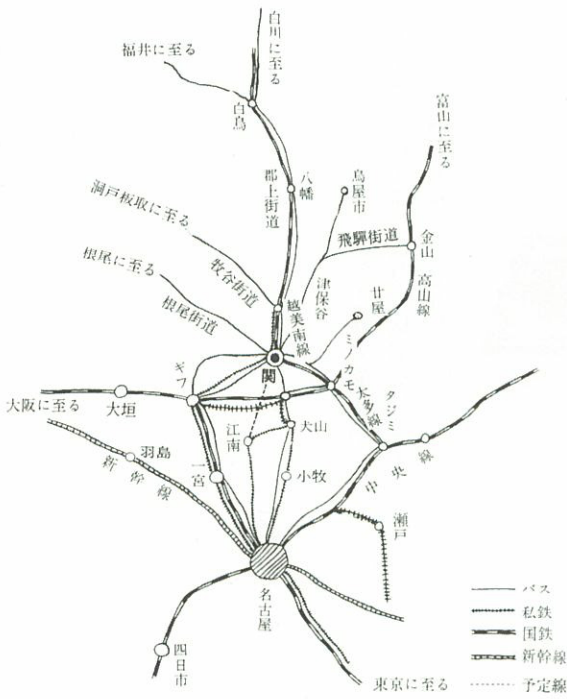


図2 関市の主な交通機関
(『関市史』関市教育委員会編 昭和42.11)

堂大師堂・阿弥陀堂・本坊客殿・三重塔)を構え、京都市東山区にある智積院を総本山とする真言宗智山派に属し、土地の人には吉田観音と呼び習わされて今も深い信仰を集めている(図1参照)。

この関市長谷寺町の地は、当寺の資料案内配布紙によれば、三通りの交通方法によって示されている。すなわち、「新岐阜駅から電車美濃町線にて新関駅下車 徒歩二十分」「新岐阜駅からバス金山線にて吉田

町下車、徒歩一分」「美濃太田から長良川鉄道関口下車、徒歩十五分」の場所であるという。関市は、在来線および飛騨街道・郡上街道(牧谷街道)・根尾街道・国道248・156号・東海北陸自動車道など主要道路がすべて集約される地で(図2参照)、太平洋側の国々を通る東海道とは異なり、列島の内陸山間部を横断する道筋の要衝の地である。また歴史を遡れば、京都から近江・美濃・飛騨・信濃・上野・下野・陸奥・出羽の八カ国、いわゆる東山道(図3参照)諸国に通じる官道の、飛騨路に入る一番目の宿駅に当たっており、交通の要衝であったことに変わりはない。関市に栄えた新長谷寺が歴史的に、当地を代表する文化を担った寺院であったことが改めて知られるのである。

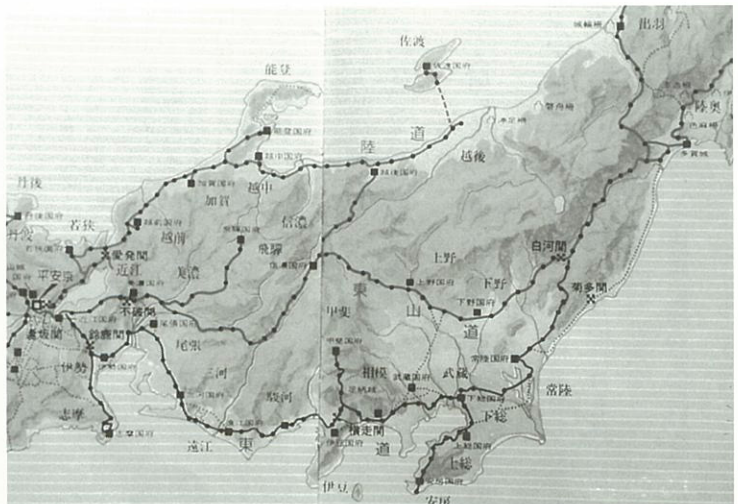


図3 東山道(『週刊朝日百科日本の歴史58 古代から中世へ』境・峠・道 中世への旅 昭和62.5)

そして、この寺の阿弥陀堂に安置される阿弥陀如来像（国重文）は毎年三月一八日のみに御開扉されている秘仏であるのだが、その来歴については、寺伝として、武将源義朝と延寿という傀儡女とをめぐり、他物語記録にはみられない、興味深い古譚が伝えられているのである。

むろんその寺伝は、そのまま事実といったものでもない。あくまで人々が大切に伝え伝えてきた伝承ではある。ここで問題としたのは、どこまでが事実として追えるのか、そして何より、その事実の間を埋める想像力、あるいは事実の先がどのような必然をもって生成されたのか、という想像力の拠つて来たる幾重もの、また幾種もの生きて動く文化の重層的なあり方についてである。

本稿においては、吉田山新長谷寺の寺伝に、仏像の歩んだ道筋と女芸能者傀儡女の歩いた道筋と、また東国武士の街道との重層性を読み取り、伝承というものがどのように生成されるものか、その成立の一道筋をたどってみたい。



図4 木造厨子入阿弥陀如来立像
(新長谷寺)
(『関市史』関市教育委員会編)

(二) 吉田山新長谷寺の寺伝 — 木造厨子入阿弥陀如来立像 —

新長谷寺の阿弥陀堂に安置される阿弥陀如来（図4参照）は、『新修関市史』「考古・文化財編」によって次のように解説されている。

阿弥陀堂の本尊として、四方開きの春日形の厨子内に、秘仏として安置される像で、極楽浄土から行者をお迎えする、来迎印を結んだ尊像である。檜材の寄木造りで、眼は玉眼を嵌入しているが、全面に漆箔が厚く施されている。

や厳しい表情に、眼鼻立ちよく、豊かな頬張りである。体軀は撫肩で、肘を全く張らず、衣文は、よく整理されて重みがあり、截金彩色の上に漆箔が厚く施されて、鎌倉時代の特徴をよく現わしている。光背と台座は、近世の後補のものである。像高九七・〇センチメートル。

そしてこの尊像には、当寺に到った伝承がまとわっているのである。

当寺による配布紙「新長谷寺文化財録」に記された「国重文・阿弥陀堂」の「国重要文化財・厨子入木造阿弥陀如来立像」についての説明は、次のようである。

毎年三月十八日開扉 阿弥陀堂の本尊として、扉に阿弥陀聖衆来迎図（図5参照）を描く春日形厨子内に安置されている阿弥陀仏は、阿弥の作で、鎌倉時代・源義朝公守本尊。現在の太垣青墓の長者の女延寿が母大炊尼と共に当山に安置された。天正時代に賊に奪われ、佐渡の国の国人堂に祀られていることを霊夢により知らされた時の住職が、佐渡の国へ迎えに行った時に金箔がはげたとされる。



図5 二十五菩薩来迎図(新長谷寺)

厨子は春日形四方開き扉仏画九品の浄土二十五菩薩で巨勢金岡の筆。この仏画が本坊庭園の作庭の基になっっているようである。

また当寺パンフレットの「厨子入阿弥陀如来像—国指定重要文化財」説明には、

平治の乱に破れた源義朝が、都を逃れて寵愛していた延寿姫のもとに（不破郡）一時身を隠した。更に追っ手を逃れて尾張の莊園に身を移すが、そこで地頭の長田忠致に殺害された。のち延寿姫が義朝の死を悼み、莊園を訪ねて尊像を屋形に持ち帰り、当寺に奉安して懇ろに弔ったという。

と、当仏像は義朝の持仏であつたもので、それを延寿という女性が当寺に運んだと、同主旨が記されている。

この阿弥陀如来像の由来「阿弥陀如来縁起」（新長谷寺所蔵）は、『新修関市史』の「通史編」にも「史料編四」にも、あるいは「考古・文化財編」にも見ることができないので、その要約文を『新修関市史』通史編によつて示せば次のようである。

(1) 「阿弥陀如来縁起」（新長谷寺所蔵）原文には源義朝の持仏であり、平治の乱後、青墓にもたらされ、文応年中（一二六〇〜六一）に青墓の長者の孫が新長谷寺に寄進したものである。また天正年中の混乱に紛れて劫奪されたが、佐渡の人が購入安置していたところ、美濃に帰りたいたいという夢告が再三あつて、新長谷寺に戻つたという数奇な運命をたどつた仏像であつたともいふ。

ところで当寺にはこの伝承に類する書き付けが存しており、「永禄七年（一五六四）に記されたものを天正一二年（一五八四）ころに龍福寺の僧が新長谷寺の玉蔵坊を訪れて写した」ものであるという武芸川村平龍福寺所蔵の「年代記」なる書き付けには、読み下し文に改めて示せば次のようである。

(2) 伝へ聞ク 此ノ阿弥陀ハ当国ノ大基長者ノ持仏堂ノ御本尊云々、仏師ハ安阿弥陀仏、然ルトコ口、京極鞍智殿ノ調法ヲ以テ、鞍智山弥陀洞ニ安置奉ル。其ノ後、当寺ニ移サレ申ス由、申シ伝ヘオハナヌ。

そしてまた、寛政四年（一七九二）に尾張藩士樋口好古の美濃巡行記『濃州徇行記』のため資料として提出した新長谷寺の寺領・建物・仏像等についての概要の下書き「一山の書付」には、次のようである。

(3) 一、阿弥陀堂 本尊弥陀 安阿弥作

源義朝公持念仏

脇土観音 勢至

宮殿金岡之画 当国青墓長者子孫寄付

弥勒菩薩志体

地藏菩薩志体

すなわち、(1) 「阿弥陀如来縁起」は二話から成つており、前話は、阿弥陀仏が義朝の持仏で、これが美濃国青墓にもたらされ、さらに新長谷寺へという経緯が示されて、その仏像を新長谷寺に寄進したのは青墓の長者の孫であつたという。時は文応年中。後話は、当仏像がさらに佐渡に流出し、のち夢告により当寺に回帰した経緯である。

問題とするのは、前話についてである。

ところが(2) 「年代記」においては、当仏像は「大基長者」の持仏堂の本尊であつたとする。「大基長者」とは、あとでふれる『吾妻鏡』にも記された青墓の宿の長者「大炊」の誤読・誤写であろうと推測されるもので、それらを含めて「云々」とするのは、これがすでに寺伝として認知されていたことを示すだろう。そしてさらに(2)伝承は、この如来像が京極鞍智殿の手により、鞍智山弥陀洞に安置され、後にそれが新長谷寺に移されたとする。

これによつて、阿弥陀如来像はおそらく義朝の持仏で青墓の宿にあつたとする伝承は動かないものの、当仏像を新長谷寺へと誘つた人物については、定かではなくるのである。

そして(3) 「一山の書付」は、(2)より二百数十年後、その縁起を要約したものであるが、当寺に如来像を寄付したのは「青墓長者子孫」とする。これは青墓の長者の子と孫なのか、子孫なのか。先に示した新長谷寺配布資料には「長者大炊と娘延寿」とされるなど、伝承もこのあたりで揺れが生じている。後述するが、頼朝が上京の折り青墓を訪れ、父の上下向の宿として父を世話した父の「御寵物」であつたゆえに「長者大炊息女等」を召して纏頭したのが、『吾妻鏡』建久元年（一一九〇）の記事である。義朝の没年、平治二年（一一六〇）三十八歳時に、長者大炊三〇歳前後とすれば、頼朝青墓訪問はそれより三〇年後のことで、大炊は六〇歳前後、娘は四〇歳前後と推定され、如来像を寄進したとする七〇年後の文応年間には、大炊も娘も存命とは考えられず、孫がいれば九〇歳前後ということになるか。可能性はありながら事実とも考えがたいのである。そうであれば(3)の書き付けにある「子孫」とするのが自然であろうが、これが前の(1)伝承と重ねられる書き付けであつてみれば、あくまで長者大炊の子と孫ということになるか。

これらの矛盾を孕んだ伝承成立の底流には、幾層もの義朝・延寿伝承が流れ込んでいように考えられるのである。

(三) 義朝と延寿

(1) 義朝

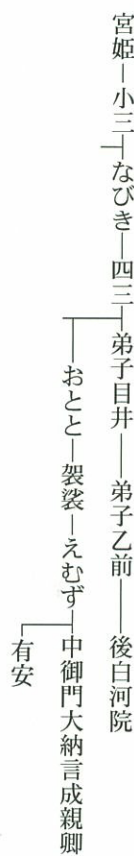
阿弥陀如来像の持ち主とされる源義朝(一一二三—一一六〇)は、平安末期の清和源氏の棟梁で、父は為義である。関東で成長し、青年期を鎌倉を拠点として活躍、「在地領主の対立を調停しながら利用し組織……」関東の武士団編成を実現して「おり、従五位下下野(栃木県)守となった仁平三年(一一五三)のころは京都を生活の基盤にしていたという。そのころ政治体制は、帝位を退いてのち天皇の父である資格で上皇が政治の実権を握る院政期の時代であった。保元元年(一一五六)、崇徳院は、父鳥羽法皇の死をきっかけに、弟後白河天皇から帝位を武力によって奪い返そうと、ここに保元の乱が起こる。後白河天皇・藤原忠通・信西側の大将を受けた義朝の夜襲により戦いは後白河院側の勝利となる。この際、敵側であった父為義と五人の弟を斬殺することになる。この乱は弘仁の薬子の変以来の都における戦乱であり、これ以後を『愚管抄』七が「武者ノ世ニナリニケル也」と記したように、中世の幕開けと位置づけられている。

その三年後の平治元年(一一五九)、後白河院の近臣として勢力を伸ばす信西・平清盛に対立して、十二月四日、義朝は兵を挙げるが、敗退。再起を図って東国に落ち延びようと、美濃国青墓の宿に宿し傀儡女たちの接待を受けるが、ここに傷を負って逃げおこせることのできない次男朝長を自らの手で討ち(『平治物語』(中)、逃れた尾張国内海で旧臣長田忠致(宗)に殺された。捕縛され伊豆に流されて一命をとりとめたのは父義朝とはぐれて遅れて青墓の宿にかくまわれた三男頼朝だけであった。

(2) 延寿

さて一方、延寿も実在の人物で、美濃国青墓の宿を出自とする傀儡一族の女性である。傀儡とは傀儡子とも表記されるが、この一族を明らかにしようとした大江匡房の『傀儡子記』によれば、彼らは「定居無ク、当家無シ」と流浪の民で編戸の民ではないと捉えられる。男は狩猟や奇術・人形使いなどの雑芸を職業とし、女は、美しく化粧をし歌を歌って売色をするのを生業とする。地

域によって等級があり、東山道がもつとも豪貴で、名傀儡を輩出し、特に今様の唱歌にすぐれていたとする。このように、陸路の宿駅に拠点をおく点において、水駅に拠点をおく遊女とは異なっているが、もつともその厳密な区別が行われたのは院政期のころに集中しており、それ以前も以後も、一樣に遊女と呼ばれ習わされている。特に東山道美濃国青墓の宿の傀儡女は、今様秘曲「足柄」を管理伝承したことで特異な位置を占めるものであった。この「足柄」を伝授された者の一人が延寿である。旧前田家・尊経閣文庫蔵『今様の濫觴』の「足柄伝承系図」を見れば、



と、延寿は、始祖天曆(村上天皇)皇女宮姫から七代目にあたる。また、藤原成親の左傍には、「後二八後白河院御弟子也」と記され、後には後白河院の今様の弟子になったとはいえ成親は、当初は彼女の弟子であった。また「飛驒前司後筑前守」と記される中原有安が彼女の弟子であったのも、彼女が東山道の青墓の宿を拠点としていたからであろうか。都の貴紳を弟子とする都と東国にかけての一流の今様歌女であったと推測できる。

そして延寿の生き生きとした実態が知れるのは、後白河院が自らの今様の正統を証するために記した『梁塵秘抄口伝集』巻十においてである。

後白河院の今様の正統を証するため、正統な傀儡女の流れの直系である青墓の宿の小大進の今様と、後白河院のそれを比較対照する今様の会が開かれたことがある。それは、「九月に法住寺にして」供花会があつて傀儡女が集まった折り、さほのあこ丸が後白河院の今様の師である乙前批判を展開したのをきつかけとして、改めて大々的に開催された「黒白」をつけるための今様の会であった。その折り、後白河院に正面から相対したのが、さほのあこ丸であり、院側に付いたのが小大進であり、また都にいたのであろう延寿であった。後白河院の歌った「古柳」を聴いて、「これこそおとど歌ひ候ひしには違ひ候はね」と、延寿は、院の「古柳」と、自分に今様を教えた祖母おとどがかつて歌った「古柳」とが、ぴったり同じであったと保証する。また、その今様の会以後、法住寺に、

江口・神崎の遊女や美濃の傀儡女が集まつて供花会が行われた時、延寿は季時入道を通して、後白河院流の「恋せは」（今様秘曲「足柄」十首中の代表歌）を習いたい旨を申し入れ、ついに院が二、三夜にわたつて「足柄」を習い取らせた。そののち暇請いに来たときに院は延寿に今様を歌わせて聞き、「神妙なり」とほめると、延寿はすぐさま、

四大声聞いかばかり 喜び身よりも余るらん
我らは来世の仏ぞと たしかに聞きつる今日なれば

と歌つたという。

院は、延寿が院に「足柄」を習いたいというのは「さかさま事」であると言つた通り、今様唱歌を生業とするプロの歌女が素人に習おうとするのは、いかにも逆ではある。それをあえて願ひ出る延寿の行為は、今様の正統であると認められた後白河院の宿願にまさしく適うところであり、延寿の最有力者と結びたいとする芸能プロとしてのたくみな生き様が感じとれる。また、延寿の今様「足柄」への院のほめ言葉に対して、即座に今様をもつて応じた機転は称賛に値するものであつた。またこの選曲は、延寿の院からのお墨付きを得た喜びが、四大声聞が釈迦から必ず成仏するとお墨付きを与えられた喜びと同じだとすることであり、さらに院を釈迦になぞらえることにもなる点で、すぐれた選曲であつたといえるだろう。

このように、美濃国青墓の宿を出自としながら、治天の君後白河院の側近くにもあつた彼女は、都の歌女として、一、二を争う位置を築いたのであろう。

そもそも、後白河院時代に、今様の正統の流れを汲んでいるかどうかが問題とされる時、その要となるのが、傀儡女四三から今様を伝授されたかどうかであつたが、その四三から教えて、延寿は四代目にあたり、後白河院は弟子筋で四代目にあたるのであつた。

ただし、四三は早死してあまり今様を伝授せずに終わったのだが、後白河院の今様の師乙前の養母目井ばかりはその秘伝を受けていたという。しかし延寿の祖母おとどについては何の注記も見出せない。その上、延寿の母にあたる製婆については「但、哥を知らず」と注記されているから、この延寿の系譜には四三の今様は伝わっていなかったとも考えれば、その「さかさま事」も納得のいくところか。四三から足柄を伝授されなかつたおとどはおそらくは目井より

も年下であつたと推測され、したがつてその系譜に連なる延寿も後白河院より年下ではなかつたかと推定できる。あるいはまた、後白河院の師匠乙前との出会いが乙前六七歳のころと考えられるので、延寿は後白河院と同年配に近かつた可能性もなくはない。後白河院が「法住寺」において今様の会を開催したのは、法住寺を御所にした永暦二年（一一六一）の院三五歳以後、次の五月の供花会については「東山の法住寺」と記され、これは「法住寺」建築の五年後の仁安二年（一一六七）の建築なので、院四一歳以前のことであつたと限定できよう。

ここに浮かび上がってくるのは、およそ三〇代の、表舞台に出るチャンスをつかもうとする、心配りのきいた明晰な判断力をもつプロとしての歌女延寿の姿であつた。

(3) 義朝と延寿 — 『平治物語』(中) をめぐって —

さて、義朝と延寿の名がともに出てくるのは、『平治物語』(中)「義朝奥波賀に落ち著く事」である。前にも触れたが、都での戦いに破れた義朝一行は、年一三歳の頼朝を雪の道に迷子にしたまま、美濃国青墓の宿にたどりつく。もつとも流布した金刀比羅宮本によって示せば次のようである。

かの宿の長者大炊がむすめ延寿と申は、頭殿御ころぎしあさからずおぼしめされし女也。彼がはらに夜叉御前とて十歳にならせ給御息女おはします。日來のよしみなれば、大炊が宿所へいり給。大炊・延寿をはじめて遊君共まいりて、なのめならずもてなしたてまつる。「姫はいづくにぞ。」と宣へば、乳母の女房たち、ぐしたてまつりて参りたれば、義朝みたまひ、「東国にくだりて別の子細なくは、人をのぼすべし。其時くだれよ。うたれたりときかば、後世をもとぶらふべし」と宣ひふくめて返しいれられけり。

と、ここには、青墓の宿の長者大炊とその娘延寿が登場し、延寿は義朝の現地妻であつたという。しかし小川寿子「延寿、義朝妻妾説生成考」は、「平治諸本の中で最も古体を残すといわれる九条家本及び陽明叢書本」との異なりを指摘する。九条家旧蔵本によれば次のようである。

美濃国青墓の宿と申所に、大炊と申遊君は、頭殿の年来の御宿の主なり、其腹に姫御前一人まします、此屋へつかせ給ひぬ。鎌田兵衛も、今様うたひの延寿がもとへつき候ぬ。此遊女共、さまざまにもてなしまいらせ候し最中に：

このように古体の九条家本では、義朝の妻は青墓の宿の長者大炊で、一人の娘をもうけており、これとは別に延寿は「今様うたひ」で、その夜は鎌田兵衛の相方を務めたとある。しかし前の金刀比羅宮本では、長者大炊の娘が延寿で、彼女が義朝の妻妾であったと変化している。さらに古態本ではその存在について触れられていただけの姫御前が、金刀比羅宮本では後に杭瀬川に身を投げたとして、延寿は母の諫めにしたがって死ぬのをあきらめ尼になったと類型的嘆きのパターンをもって増補され、『平治物語』延寿説話は完結されている。ちなみに、延寿はこの時、二三三歳ということになる。

以上のように物語には二通りの伝承があるわけであるが、これと密接な関連をもつのが、『吾妻鏡』建久元年（一一九〇）一〇月二十九日の件である。父の死後三〇年、頼朝は上洛の折り、父義朝の討たれた道筋を逆にたどり、父が世話になった者たちに報償を与えた。二五日、尾張国野間庄に義朝の廟堂を拝し、二八日には鳴海から美濃国墨俣へ、翌二九日が青墓の宿である。

青波賀駅において、「長者大炊息女等」を召し出され、纏頭あり。故左典厩（義朝）、都鄙に上下向の毎度、この所に止宿せしめたまふの間、大炊は御寵物たるなり。よつてかの旧好を重んぜらるるが故か。故六条廷尉禅門（為義）の最後の妾（乙若以下四人の幼息の母、大炊の姉）内記平太政遠（保元乱の時、誅せらる。乙若以下同じく自殺せしめをほんぬ）平三真遠（出家の後、齋源光と号す。平治敗軍の時、左典厩の御共として、秘計を廻らし、内海に送りたてまつるなり）大炊（青墓の長者）この四人は皆連枝なり。内記大夫行遠の子息等と云々。（「」内は原文）

頼朝が青墓の宿で召したのは、「長者大炊息女等」である。「等」とあるのは、これは、長者大炊の息女という一人ではなく、青墓の長者大炊とその間にできた息女との二人を召したと読める。父義朝が都と東国との東山道を上下向したとき、宿としたのが美濃国青墓の宿の長者大炊の家で、子まで成していることになる。

もつとも青墓の傀儡女と源氏の武将との関連は、これのみではなく、『吾妻鏡』の記事に説明されたように、長者大炊の姉は義朝の父為義の最後の妻妾であった。この人は都に住しており、保元の乱時、子供四人も殺されたと『保元物語』「為義ノ北ノ方身ヲ投げ給フ事」に詳しく語られるところである。あるいは、姉が為義に伴われて都に上った跡を継いで青墓の宿の長者となったのが、妹大炊であったのかもしれない。

青墓の地は、現岐阜県大垣市青墓町、東山道の宿駅の一つで、都からはおよそ二、三日の道程である。伊吹山系と鈴鹿・養老山系の狭間にある不破の関跡を越えて畿内と別れを告げ、東国の入り口に位置した交通の要衝であった。しかしその後、都より一泊目の鏡の宿は変わらぬものの、二泊目を不破の関直前の番場に泊まり、三日目を青墓の先の赤坂で泊まるようになったせいか、やがて青墓の宿は廃れたようである。

飛鳥井雅経『明日香井和歌集』は、建久九年（一一九八）から承久三年（一二二二）の詠作が集められているというが、この「雑」の中に、

あづまへ下るとて、青墓の宿にて遊びて侍りける傀儡、上るとたづねければ、みまかりけるよし申すを聞きて、

たづねばやいづれの草のしたならん名はおほかたの青墓の里

と、ある。あたり一帯青墓という地名なので、どうやってなじんだ傀儡女の墓を訪ねたらよいか分らないと、東国から都をわざわざ雅経は詠んでいるのである。このよう

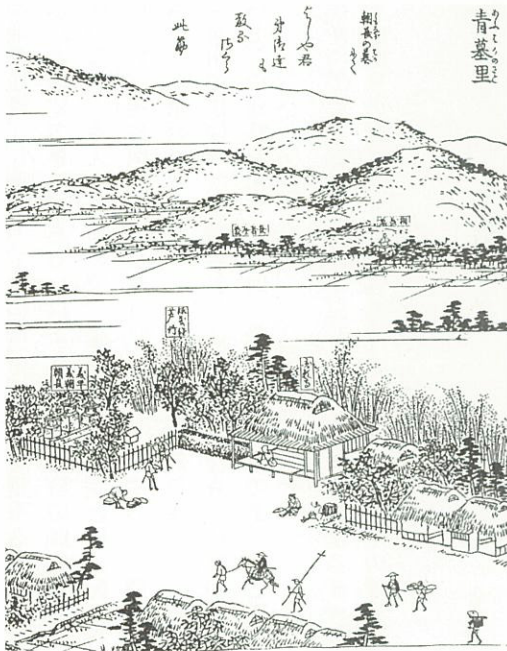


図6 青墓里 朝長の墓にて
よしや君弟御達も散るさくら 此筋『木曾路名所図会』

に、鎌倉初期、青墓の宿は、なお傀儡女のメツカであったようだが、その孫である飛鳥井雅有の日記『春の深山路』の東下りの件では、弘安三年（二二八〇）一月一六日、番場を出て、「青墓の宿は昔その名高き里なれど、今は家も少なく、遊女もなかり」と、赤坂の宿に止まっている。そして時降つて、文化二年（一八〇五）に刊行された、秋里籬島編著の木曾路の絵入り地誌『木曾路名所図会』には、「むかしは駅なり。今は小里となりぬ。青墓の長の第跡あり」として、朝長の墓のある山の左麓の松林とおぼしきあたりに長者屋敷と記して、西村中和による挿画が描かれているばかりである。（図6参照）

このように後には廃れてしまった宿駅ではあるが、平安朝後期から鎌倉前期にかけて、青墓の宿は東国から不破の関を目前として、東海道・東山道・北陸道あるいは伊勢路からも、畿内直前の集約点として、馬も、荷も、武将も、そして歌女も、彼らが持ち運んだ歌謡も、ここに一旦は留められ集約されて、豊かに管理・伝承されたのだと考えられる。

そして青墓の宿の長者とは、青墓の宿の運営、またここを拠点とする傀儡女一族を統括する長であろう。「大炊」は、当地を治めていた豪族大炊氏と関連すると捉えるのが自然であるが、長者大炊の実態は分からない。男とする説もあるが、女性であろうとする説が定着している。大炊氏の長たる人と青墓の宿の長者の子であるところから、父方の姓大炊を通り名とした傀儡女で、母を継いで青墓の宿の長者であったのが、長者大炊ではなかったかと推定されるのではないだろうか。

女性説を説く小川論文は、「円興寺過去帳」（貞享五年の奥書を持ち、著名人の没年月を前半に印刷し、後半に各寺が戒名没年等を書き込めるようにしたもの）の小川氏の解説がある。に大炊家の人々を検索し、仁安四年（一一六九）六月四日に没した「妙現禪尼 大炊政遠妻」を長者大炊に比定し、また、嘉禄元年（一二二五）八月に没している「妙西禪尼 大炊娘」を「大炊息女」と比定する。しかしこれだと、頼朝が青墓を訪れた時、長者大炊はすでに没していることになり、息女一人と会ったことになる。それだと『吾妻鏡』の「等」の文字に合わない。

動かないところは、都の著名な歌女となった青墓出身の傀儡女延寿の存在であり、および『吾妻鏡』建久元年（一一九〇）一〇月二九日条に記されたところの、青墓の宿の長者大炊が義朝の妾妻で息女がもうけられていたという事実である。あとは青墓の宿出身の延寿を、敗戦の將義朝が子息朝長を自らの手にかける

『平治物語』（中）の青墓の宿の場面に引き込んで、その時長者屋敷に歌女として延寿もいたとも、あるいは長者の娘が延寿その人で義朝の娘（長者には孫）がいたとも、娘は入水自殺し延寿は尼になったとも、物語は人々の想いをかなえるべく、さまざまに変容・増補されつづけていったのだと考えられよう。

付け加えるならば、現在メトロポリタン美術館蔵の六曲一双の「保元・平治合戦図屏風」（桃山時代には、左上端に富士を配し、東国入口の美濃国青墓の宿が、三曲上方に描かれる。手負いの朝長が父の手によって介錯される傍らに、嘆く尼姿が描かれ、小紙によって「長者大炊」であると知られる。これは金刀比羅宮本『平治物語』と流れを一にするものである）。

このように京都から不破の関を越えて美濃国青墓の宿へと東山道を落ち行く敗戦の將義朝の最期を語る物語に見たところの数々のヴァリエーションを生み出す豊かなエネルギーは、さらに、義朝持仏にまつわらせて青墓の宿の長者あるいは延寿を、青墓を起点として東山道を東進させ、関市新長谷寺に新たな伝承を結実させてゆく。これが、軍記物語にも組み込まれずに、一山に集約されて成った、もう一つの伝承の土壌だったのだと思われるのである。

(四) 隆覚・二階堂行藤

さてここで改めて注意されるのは、新長谷寺の創建が、義朝・青墓長者大炊（または延寿とも）といった人物の時代より、はるかに後である点である。

新長谷寺創建の時期については、当寺本尊の十一面観世音菩薩像（国重要文化財）についての寺伝によって推測することが可能である。長禄元年（一四五七）の「新長谷寺再建勸進帳写」にもあるが、宝暦七年（一七五七）の縁起書で、興正寺住職の諦忍妙庵が記した「縁起」を読み下し文によって示せば、

：濃州武儀郡吉田山新長谷寺者護忍上人：屠蘇ヲ此ノ地ニオイテ諦ヒ、行道年有リ。：特ニ和別泊瀬山ニ上テ、本尊ヲ礼敬、一七日夜夢幻ノ中、一老僧有リテ告ゲテ曰ク：本郷ニ還ルニ守庵ノ僧迎ヘテ告ゲテ云フ、頃、寄豪有リテ一人來タリテ告ゲテ白シテ曰ク、我ハ是レ仏土ナリ、和州長谷寺ニ住ス、今庵主ノ為ニ聖像ヲ彫刻マント手カラ斧斤ヲ運ラヌ、風ヲトシ成ス、不日ニシテ功畢ル、端麗言フベカラズ、恍惚ノ間、忽ニ其人ノ所在ヲ失スト、上人此ノ旨ヲ聞キ、此ノ像ヲ視テ、則チ泊瀬ニ在ル日ノ靈感妄

ナラザルコトヲ知ル、喜躍措シム所ナシ、数年ノ後衆力ヲモツテ一堂ヲ造營シ、モツテ彼ノ像ヲ安ス、九阜ノ鶴ノ声天ニ聞フ、後堀川院勅シテ新長谷寺ノ号ヲ賜フ²¹

とある。

すなわち、後堀河院の時代（「新長谷寺再建勸進帳写」では、貞応年間（一二二二〜二四）に、護忍上人という行道者が、大和長谷寺に参籠中、一老僧から故郷に帰るべしとの夢告を得て美濃に帰国したところ、庵を守っていた僧が告げるには、一人の貴人が来て自分は長谷寺の仏で庵主のために聖像を彫刻しようとしたのだと告げると端麗なる像を造りたちまちに姿を消したという。護忍上人は霊夢の誠なるを知り、数年後一堂を造営し、かの像を安置した。これを聞き及んだ後堀川院は新長谷寺という寺号を賜った。これが新長谷寺の縁起である。また寺社奉行に提出した文政五年（一八二二）の「書上」（新長谷寺蔵）には、護忍上人が貞応二年（一二二二）に草庵を建立し、後堀河天皇の眼病平癒の祈願に成功した功により「新長谷寺」の寺号を贈られ、嘉禄二年（一二二六）には七堂伽藍を造立したと伝える。これらの寺伝は、当寺が白山信仰の流れを汲む寺であるところから生成されたと考えられるだろう。「雑記」（新長谷寺史料、史料編）によれば、当寺の鎮守三所の一つとして、「白山権現 往古勸請」とあつて、元来新長谷寺の鎮守堂に白山権現が祀られていたことから推定できるといふ。

ここからあらためて知られるのは、青墓の宿の長者子孫によって新長谷寺に伝えられた義朝の持仏とは、新長谷寺創建以前のことになるといふ、時代的矛盾である。

これに対する答えの一つは、新長谷寺創建以前に、その前身となる何らかの寺院があつた可能性であろうか。これについては現在何の資料も持たない。

あるいはまた、義朝の戦死以後久しく他の寺院にあつた義朝の持仏と伝えられたそれが、何らかの縁、あるいは理由によって、新長谷寺創建以後、ここに伝えられたものか。これについては、いくぶん考える余地があるかと思われる。

護忍上人に始まる新長谷寺は、途中でその性格を一変させた時があつた。それは元亨四年（一二二四）に始まる第七世隆覚の登場である。前掲「縁起」によれば、新長谷寺は、

其ノ後、歳霜推遷シテ、稍ク頽廢ニナンナントス²²。

と、衰微していったのがわかる。これが「書上」にある「新長谷寺住職の歴代」に見るところの、第一世護忍上人から第六世覺舜までの約七〇年後の姿であろう。ここに登場したのが隆覚であつた。前掲の「縁起」には、次のように記される。

永仁年中、法印隆覚、卓抜ノ才ヲ負ヒ、力ヲ励メ、其ノ廢ヲ興ス。伏見院宸奎ノ額ヲ賜フ。之ニ因リテ法運挽回、貞応ノ古ニ恥無キナリ。正安二年、舞馬ノ変ニ罹リ、堂宇悉ク焼土ト成ルヌ。時ニ二階堂道雅、隆覚ト心ヲ合セ力ヲ載セテ營構ヲ事トス。

「書上」の「新長谷寺の住職の歴代」を見れば、第七世隆覚は「中興開山隆覚」とあつて、次は「第二世」と数えられていくのである。『新修関市史 通史編』によれば、隆覚は「台宗叡山北谷学侶也」（「雑記」とあるように、天台宗の僧侶であり、「この時期から新長谷寺は天台宗の影響下にも入つたと推測される」とも「白山信仰のみならず、真言宗・天台宗両派が研鑽する学問研究の寺院へ変化をしたようである」とも結論づけている。

けれども新長谷寺の変化はそれのみではあるまい。「縁起」に記されていた二階堂道雅行藤の「新長谷寺への影響力の強さが、義朝持仏とされる阿弥陀如来像の当寺への寄進に、おおいに関与していた可能性を感じるのである。

二階堂氏は伊豆国出身で、鎌倉時代前期の初代行政が鎌倉の永福寺（別名二階堂）に住んだところから姓とした鎌倉幕府政所別当を務めるなど代々幕府中樞を担う一族である。『新修関市史 通史編一』によれば、二階堂行藤（一二四六〜一三〇二）は正応元年（一二八八）出羽守に任ぜられ、永仁元年（一二九三）以降鎌倉政所執事を務め、越訴奉行や引付頭人も歴任する鎌倉幕府の重鎮であつた。また二階堂氏は、新長谷寺の貞治二年（一三六三）に「武義庄吉田郷新長谷寺」とあるところの武義荘の地頭職であつたと推定されている。

「縁起」に続いて記された「雑記」によれば、三重塔について、

二階堂出羽守藤原朝臣行藤（法名道雅）之息女理秀法尼ノ建ル所ナリ。道雅ハ濃州領主也太平記ニ謂ル二階堂入道道蘊ノ父ナリ、法印隆覚八道雅ノ

肉弟ニシテ台宗叡山北谷ノ学侶ナリ³³⁾

とあって、新長谷寺の中興の祖隆寛は二階堂行藤の実弟であり、行藤の娘は当寺に三重塔を建てた理秀尼であるというから、新長谷寺一山すべて、二階堂行藤の傘下にあったと言っているだろう。この鎌倉武家の権威としての鎌倉幕府創始者頼朝への憧憬が、青墓の宿にあつたという義朝持仏のいわれを持つ阿弥陀如来像を当寺に引き付けたのではないかと考えられるのである。そしてその仏像とともに、義朝とその妻妾として伝承に生きる青墓の宿の長者、あるいはその娘延寿が、あるいはまたその子孫が、当寺に運んだのだという伝承がまとわっていったものではなかったか。その時期はまた、鎌倉初期に成立した『平治物語』の古態を残存させるという九条家本にみるところの、青墓宿を媒とした義朝と延寿という両著名人の取合せから、さらに一、二世紀かけての延寿の義朝妻妾説が生成されていく伝承生成と流れを同じくするものではなかったか。そこには、青墓の宿から関市吉田町まで東山道そして飛驒路を歩いた放浪の語り部あるいは遊芸の徒の存在も重ねられるのだろう。

(五) 終わりにかえて―鉄の道―

ここに改めて思い起こされるのは、一で述べた「年代記」(一五六四年の記録を一五八四年に書写)で、当阿弥陀如来像が大炊長者の持仏堂から京極鞍智の手によって鞍智山弥陀洞に安置され、さらに新長谷寺に移されたとする伝承である。鞍智は、中世では関市の西半で、鞍智郷と呼ばれていた。ここには近江源氏佐々木氏の一族京極氏が地頭職につき、ここより地名を苗字にした分家が出来たらしいという。つまり、青墓から東の鞍智へ、そしてさらに東の関市へという、如来のたどった道筋が示されているのである。

「鞍智郷・鋳物師屋郷・小築郷が京極氏の所領であつたとする文書の初見は、延文四年(一三五九)一〇月二二日の足利義詮袖判下文である(周防佐々木文書³⁴⁾)」³⁵⁾といひ、その後およそ一〇〇年後の長享二年(一四八八)、「鋳物師屋(除同名鞍智分)、鞍智郷(除同名)、小築(長享二年室町幕府奉行人連著奉書³⁶⁾)」によれば、「これによって、鋳物師屋と鞍智郷の中には、少なくとも京極持清の部分と鞍智氏の分とが存在することが分かる」といふ。ここに所見できる鋳物



図7『東北院職人歌合』

師屋の地名からは、史料にはないのだが、ここにかつて鍛冶職人が住んでいたと推定されているのである。

この現倉知の地に東接する新長谷寺の位置する関市は、現在、日本刀鍛練および日用刃物(打刃物)等、全国一の刃物産地である。美濃国に鍛冶産業が起こつた実態は不明な点が多いのだが、中世の土壙や山茶碗などが出土している池尻郷の弥勒寺東遺跡に近い「和田山からは、鉄滓など鍛冶遺跡をうかがわせるものが出て」³⁷⁾おり、関市の飛驒路の先には、赤鉄鉱を産する金生山も位置している。このほか飛驒路に沿って「武儀町には間吹・多々羅・市内に日立など製鉄に関連する地名」³⁸⁾を見ることが出来る。

関鍛冶の祖と伝えられる者に、寛喜元年(一一二九)のころ伯耆国檜原から関に移住した元重(基重)、また正元元年(一一五九)には、大和より千手院兼永が美濃に移住し、その二代目は金重の娘婿として関を迎えられている。そして元応・正中(一一三三〇)年代のころ大和から兼氏が移住している。南蛮鉄の輸入により、おおいに繁栄し、名工を輩出したという関鍛冶の歴史を築いたという。³⁹⁾すなわち、その時期は、護忍上人の新長谷寺の創建および二階堂行藤・隆寛による再建の時期と同じくとも言える。その後も、『碧山日録』寛正二年(一四六一)―二月二日条に、太極が関に来て、早速鍛冶にかみそりを作らせると記され、⁴⁰⁾蜷川家文書「進藤光盛書状」(「永祿三年(一五六〇)」)には、

「濃州関之打物・太刀・小刀・其外束之物」とあるなど、関の刃物産業は、繁栄をきわめたのであり、「このような刃物の流通に対し、京極氏がならんかの関与をしていた可能性は高いが、今これを知る手がかりはない」という。

『東北院職人歌合』（一四一四年成立）三番には、鍛冶と番匠とが組み合わされ（図7参照）、これは『七十一番職人歌合』（一五〇〇年成立）一番においても踏襲されている。ともに木材が不可欠であり、また番匠も鋸や鉋・墨金など刃物を用いるもので、同種の職掌と捉えられていたらしい。特に後者の画中詞（図8参照）を見れば、鍛冶は、「京ごく殿よりうちがたなを御あつらへ候。大事に候かな。かゝるべき」と、京極殿の名が見られ、鍛冶の出自が京極殿の領土たる関一帯であることも推測され、また番匠は、おそろく飛驒の匠なのであろう。その画中詞には、「我々もけさは相国寺へ召され候。暮ぞぞかへり候はんずらむ」とあって、飛驒の匠とおそろくは関の鍛冶と、ともに第一級の職人が、応仁・文明の乱で焼失した相国寺の再建に従事していると設定されていることが知られる。

このように鞍智さらに東方の関の地が、鍛冶産業の地であることが知られるが、それでは、阿弥陀如来像来歴の、およびその運搬者となった傀儡女の源の地である青墓の地はどうか。

鎌倉時代までの鍛冶を集録した『観智院本銘尽』には、美濃にいた鍛冶として、泉水・長基・有行の名が見えるが、金刀比羅宮本『平治物語』は、源氏重代の太刀「髭切」を清盛に取り上げられるのを惜しみ、美濃青墓の長者が、これに似た泉水の太刀をもつて偽ったという。清盛は喜んだというから、清盛の



図8『七十一番職人歌合』

画中詞は、番匠「我々もけさは相国寺へ又めされ候。暮ぞぞかへり候はんずらむ」鍛冶「京ごく殿よりうちがたなを御あつらへ候。大事に候かな。かゝるべき」と（『職人歌合総合索引』赤尾照文堂 昭和57.11）

無知を嘲笑するとともに、泉水の太刀が清盛をだませるほどの技でもあったと解釈できようか。物語ではあるが、義朝の太刀を仲立ちとした青墓と鍛冶の繋がりである。

そして無視できないのは、青墓の宿から一五キロメートルほど南に位置する南宮大社である。美濃国不破郡（現岐阜県不破郡垂井町）に鎮座し、祭神は金山彦命で、この神は金山・製鉄を掌る神である。「南宮」の由来については、国府の南に位置するからとも、製鉄神を祀る座としての南の宮を意味するなどの説がある。承和三年（八三六）に従五位下を授けられ、順次位階を上げて、貞観元年（八五九）には、正二位に叙せられた。また中山南神宮寺は天慶三年（九四〇）平将門調伏の祈りを修して、畿内をまもる東国の武力の神の性格を有していた。美濃国の刃物をはじめとする金物は、この神社に奉納され、今日でも秋の大祭には、神官が鍛冶を行つて神に奉納する関市を中心とした全国の刃物産業・鍛冶を陶冶する神社である。

このように、義朝持仏と伝えられる阿弥陀如来像の歩いた美濃国青墓の宿↓鞍智↓関新長谷寺へと東進する道は、東国武者の道であり、その産業文化が育んだ刃物の道でもあった。そしてまた東国武者と深い接触をはかった青墓の宿を拠点として、今様唱歌の技芸と売色とを生業とする傀儡女あるいは語り芸能の徒の歩いた道でもあった。これらの幾筋もの東山道を流浪し変容しつつける文化の合流点が、新長谷寺に伝承されることになった阿弥陀如来像にまつわる傀儡女延寿伝承ではなかつたかと考えられるのである。

【注】

- (1) 『新修関市史』『考古・文化財編』（関市教育委員会編 平成6・3）八一―四頁
- (2) 『新修関市史 通史編 自然・原始・古代・中世』（関市教育委員会編 平成8・3）八九〇頁
- (3) 「年代記」は注(2)と同書・八九―一頁
- (4) 「一山の書付」（『新修関市史 史料編・近世四・第五部 社寺―新長谷寺・資料 三三九』）
- (5) 『平安時代史事典』（平凡社）
- (6) 宇津木言行「古代中世クグツについて」（『日本歌謡研究』三九・平成11・3）

- (7) 馬場光子「今様の濫觴」(『今様のこころとことば』三 弥井書店・昭和62・5)、「青墓考」(『梁塵』一五・平成9・12)
- (8) 「今様の濫觴」足柄伝承系図は、『梁塵』二(昭和58・12) 影印および『梁塵』一五平成9・12馬場光子翻刻を参照。
- (9) 『梁塵秘抄口伝集』十巻は、新編日本古典文学全集を引用。
- (10) 注(8)と同じ。
- (11) 馬場光子「乙前の没年―梁塵秘抄成立論のために―」(『日本歌謡研究』三五・平成7・12)
- (12) 金刀比羅宮本『平治物語』は岩波・日本古典文学大系本による。
- (13) 小川寿子「延寿、義朝妻妾説生成考―青墓長者大炊を手がかりに―」(『梁塵』一・昭和58・12)
- (14) 九条家旧蔵(学習院大学図書館蔵)本『平治物語』は岩波・新日本古典文学大系本による。
- (15) 『吾妻鏡』建久元年一〇月二十九日の件は、『全釈 吾妻鏡』二(新長谷寺人物往来社)によった。へ内は分かち書き部分。
- (16) 『明日香井和歌集』は新編国歌大観・三によった。
- (17) 『春の深山路』は、新編日本古典文学全集『中世日記紀行集』によった。
- (18) 『木曾路名所図会』は、『日本名所風俗図会』一七「諸国の巻」II(角川書店・昭和56・10)によった。
- (19) 『新修大垣市史 通史編』(大垣市 昭和43・4 一一五頁)
- (20) 注(13)他。
- (21) 『大垣市史青墓編』(大垣市 昭和52・11)
- (22) 注(21)と同書。
- (23) 『日本屏風絵集成』五(講談社・昭和54・5) 辻惟雄解説(一三四頁)
- (24) 「縁起」は注(4)と同書の資料「三三六」。
- (25) 「雑記」は注(24)と同じ。
- (26) 注(24)と同じ。
- (27) 注(24)と同じ。
- (28) 注(2)と同書。第一章 中世の信仰、第一節白山信仰と天台・真言宗寺院、八八六頁。
- (29) 注(28)と同じ。八八七頁。
- (30) 注(29)と同じ。
- (31) 『国史大事典』参照。
- (32) 注(2)と同書。第一章・第一節 鎌倉期と関近辺の武士、七五九頁。
- (33) 「雑記」は注(24)と同じ。
- (34) 注(32)と同じ。七六一頁。
- (35) 注(2)と同書。第一章・第二節 室町期と関近辺の武士、七六七頁。
- (36) 注(2)と同書。第二章・第三節 市域の郷、七四九頁。
- (37) 注(35)と同じ。七六八頁。
- (38) 注(36)と同じ。七五三頁。
- (39) 注(36)と同じ。七三四頁。
- (40) 『新修関市史 刃物産業編』(関市教育委員会編 平成8・12)
- (41) 注(40)と同書。
- (42) 注(40)と同書。
- (43) 注(40)と同書。
- (44) 『東北院職人歌合』は、『職人歌合総合索引』(赤尾照文堂 昭和57・11)による。
- (45) 『七十一番職人歌合』は、注(44)と同書による。
- (46) 注(41)と同書。
- (47) 『大垣市史』(大垣市教育委員会) 参照。